



くう、ねる、あそぶ、夜はのむ

©糸井重里



料理長であり、マネージャーでもある塚田春夫は野菜ソムリエの資格を持つ。自ら育てた野菜が彼の料理を彩る。「このホテルをもっともっと、スタッフたちが仕事に張り合いを持って楽しく働ける場所にしたい。それがお客様へのサービスにつながるから」のん気なおっちゃんかと思いきや、ホテルにかける思いは深い。

萌木の村というところには
静かな森の生活がすごせる
小さなホテルがあるそう。

だいたい月刊 12月号

新 萌
聞 木
の
村

MOEGINOMURA
SHINBUN
Vol.4

DO YOUR BEST
AND IT MUST BE FIRST CLASS
— PAUL RUSCH —

KIYOSATO
MOEGINOMURA

萌木の村

発行：萌木の村
〒407-0301
山梨県北杜市高根町清里3545
tel.0551-48-3522
fax.0551-48-3550

Editorial:Nakajimagumi
Text:Hironori Nakajima
Photo&Illust:Masayuki Kobayashi
Design:Kikuno Shimizu



とある日の午後3時ごろのことです。ホテル・ハットウォールデンのレストランNESTでは忙しかったランチタイムも終り、ディナーまでつかの間のお休みです。さっきまで庭の石釜でピッツアを焼きまくっていた料理長の塚田さんが野良着で登場です。吊るし柿にする柿を野辺山にある萌木の村農園に取りに行くのです。「塚田さん、野菜の収穫ですか？」客室に飾る花を庭の花壇で摘む女性が声をかけます。ホテルの姐御的存在である藤井さんです。

「こんにちは」おや、二人に話しかけてきたのは、上品にお年をめされたご夫婦です。「あらA先生。今日はお泊りですか？」「ちがうのよ。近くまで来たものだから、顔出さなきゃって」お二人はホテルオープン当時からのお馴染みさんです。「木内、呼んできましょうか？」藤井さんが給仕長の名前を出します。「いらつしやるの？久しぶりにお会いしたいわ」「ではお茶でも」塚田さんは、ご夫婦をクローズしたばかりのレストランへ案内します。

萌木の村、ホテル・ハットウォールデンでは、そんな穏やかで暖かい森の時間が、ゆっくりゆったり流れています。一度、ご宿泊のほどを。美味しい料理と美酒の数々をお待ち申上げております。



どんなに小さなホテルでも一流のサービスがなくてはならない。

萌木の村社長、船木上 次は10代の頃からホテルがやりたかった。23歳でレストランROCKを開業するも、ホテルがやりたくてしょうがない。だつて清里第一号のホテルやりたいたん。26歳になるともう我慢できない。ポール先生の愛弟子で、ホテルオークラの海外営業を担っていた秋吉光男氏に駄々をこねてホテル経営

のノウハウを学び始める。欧米の超一流ホテルを視察していた時のことだ。「僕ももっと小さなホテルが見たい。B&Bとか」静かに諭された。「どんな小さなホテルをやるにも、そこには超一流のサービスが無ければならない」28歳、ホテル・ハットウォールデン開業。この小さなホテルは、いまだ発展途上である。



ランチのナポリ風ピッツァは石釜で焼く。遠赤外線効果でふわふわパリパリ。



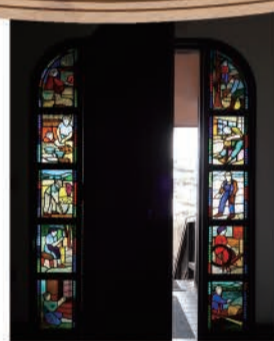
ディナーは塚田オリジナルの創作料理。自家栽培の高原野菜がうますぎ。朝食は和テイスト。心安らぎます。

コンシェルジュの役割を担う木内節雄は、ソムリエの資格を取るべく猛勉強中だ。「ネストでは滅多に手に入らない山梨産のプレミアムワインが飲めます。2012年も2013年も最高の出来です。ぜひご賞味ください」山登りと野鳥と写真をこよなく愛す彼に、いろいろな蘆薈を聞かせてもらおう。



Nest

ネストとは鳥の巣。訪れる野鳥たちを眺めながらのランチは格別だ。現在、店内改装を計画中。巨大なワインセラーが設置される予定だ。



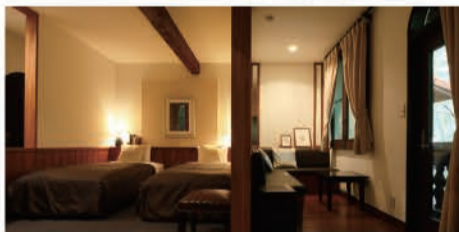
清里開拓当時の労働風景を描いたステンドグラスが、エントランスでお出迎え。



ホテルのムードメーカーを務めるのは妙齡の美女、藤井満美子。「こじんまりとした手頃な広さ。居心地のいいホテルですよ。かゆいところに手が届くようなサービスを心がけています」6歳の男の子の母である彼女「バイトだったのに産休も育休も貰えたんですよ」いいホテルにちがいない。



ゲストルームへの廊下。クラシックホテルの趣きですなあ。



お部屋は4タイプ。豪華ではありませんが、お客様の居心地のよさを最優先した造りです。ご意見ご要望をなんなりと。



萌木の村の金庫番であり、ホテルの統括役員である船木淳の、若かりし頃の写真。右の写真のように今ではロマンスグレーのダンディーおじさんである。奥様は元キャビンアテンダントの京子さん。村の運営に欠かせない脇役の一人だ。萌木の村に遊びに来て、淳の毒牙にひっかかった。



モンゴルからの留学生ジャムカ。夢はモンゴル版萌木の村を設立すること。



シェフの宮沢くん、新人の神子沢さんを加えると主要スタッフ勢ぞろい。アットホームですねえ。一流のサービスを目指してはおりますが、至らない点がありましたらどしどしお申し付け下さい。

大人の洋酒文化をハットウォールデンで成熟させるのだ！

上の写真をご覧ください。なんとも贅沢な酒酒。南極で発見された100年以上も前のウイスキーのレプリカまである。コイツをロックで飲むための本物の南極の氷も秘蔵している。こいつは大富豪のコレクションか！ここは銀座の高級ナイトクラブか？ちがいます。萌木の村のホテルにあるバー&ラウンジ・パチ。仕入れているのは船木上次という名の男である。この男、酒が一滴も飲めない。ビールを啜るだけでご酌だ。どうしてそんな男がこんな高級な酒をバカスカ仕入れているのか？どうしてこんなにリーズナブル



Rare Old HIGHLAND MALT WHISKY on the Antarctic Rock 3,000yen ~

模を誇るサントリー白州蒸。世界屈指の設備と規模を誇るサントリー白州蒸。中14℃前後に保たれる洞窟の中で、萌木の村発のうまい酒が熟成させる予定だ。

中なのは穴掘りだ。日々、男たちが泥にまみれて穴を掘っている。仕切っているのは萌木の村の番人、輿水章一だ。村長みずから時間の許す限り掘る。村民たちも老若男女を問わず、入れ替わり立ち代り掘る。パチテンダーですら例外ではない。掘った日の夜は手が震えてシェイカーさばきが絶妙になるらしい。とにかく掘って掘って掘りまくる。レンガを積んで積んで積みまくる。完成した暁にはワイン、ウイスキー、ビールなどの貯蔵庫になる。一年



「ここで君のつくった酒を飲むために泊りに来たんだよ」
 パーテナー久保田勇が作り上げようとしているのはそんなバーだ。山梨カクテルコンペティション2011で優勝。ウイスキーをベースに桃と桜をアレンジしたショートカクテルの名前は「桃源郷」という。メニューには無いが頼めば振ってくれる。一流である。



陶壁「遥なる瞬へ（はるかなるときへ）」

未来に向けて飛翔する 陶の煙突「遥なる瞬へ」

パーチを訪れたなら、暖炉の煙突に注目してほしい。不思議で妖艶な煙突だ。陶器の煙突。陶芸家、三井康生作。彼は萌木の村の村民だ。花や果物の灰を釉薬にして絶妙な色彩の器を世に送り出している萌木窯の主だ。30年前のホテル改装時、新進気鋭の陶芸家だった彼のもとに舞い込んだ難解なる注文だった。煙突に焼き物をかぶせてほしい…「どうせやるなら、角を曲げてやれ」普通は四角い煙突のそれぞれの面に陶板を取り付ける。それじゃ面白くないから曲げようというわけだ。土は焼くと縮む。そこで原寸大より一割大きい木枠を造り、それに粘土を巻きつけた。生乾きの間にパズルのように切り取って、窯へ。焼き上がったものを煙突に貼り付けていった。超難しい。半年かかった。萌木の村の発展を願って十羽の鳥を飛翔させた。一見の価値ありである。



「私が言うのもなんですが、重厚で落ち着いた雰囲気のあるバーです。東京にもちょっと無いと思います。私も仕事を離れて、この場で心ゆくまで酔い痴れてみたい。パーチ、止まり木にとまってね」
 パーテナー久保田談

酒をこよなく愛する人のための宿泊プラン 破格の¥100,000!!

一泊二食三種ボウモア PLAN

- ① BOWMORE BLACK SHERRY CASK 1964 HALF SHOT
- ② BOWMORE GOLD FINE OAK CASK 1964 HALF SHOT
- ③ BOWMORE WHITE BOURBON CASK 1964 HALF SHOT

通には堪えられない極上プランであります。



してこんなにリーズナブルな値段で提供しちゃうのか？銀座で飲めば下手すると一桁ちがうぞ！富をひけらかしたいのかジョージ！何を考えてるんだ！
 そんな愚か者は萌木の村にはいない。そう、彼は愚か者ではない。彼には信念がある。成金趣味でもなんでもない。バカ高い洋酒たちを、借金までして買う。飲めないのに。理由はシンプルだ。ここ清里に、八ヶ岳に、本物の、大人の、アルコール文化を定着させたい。日本全国に一目置かれる洋酒文化の熟成したリゾートにしたい。彼は、そう強く願っているのだ。「このあ

模を誇るサントリー白州蒸留所は言うにおよばず。北杜のワイナリーで作られる、抽選でしか手に入れることのできないプレミアムワインは、試行錯誤と計り知れない苦労の末にこの世に生れ落ちた。畑の場所にちなんでTSUGANEと名づけられた。同じく北杜にあるワイナリーの代表作、キュベ三澤はフランス5大シャトーに匹敵するとまで称されている。萌木の村でつくられる。萌木の村でつくられる。手前味噌ながら自信がある。それら地元産の酒に加えて、世界中の銘酒をこのバーにそろえたい。そこから成熟した大人の酒文化が生まれるはずだ」鼻息は荒い。



い酒を熟成させる予定だ。ホテル・ハットウォールデン。高原料理に舌鼓を打ち、世界の美酒に酔い痴れて、心地よく眠る。そんな一夜のために存在するホテルである。



2013 Paul Rush Dream Project

ダンサーからの手紙

「ポール・ラッシュ・ドリーム・プロジェクト2013」今年も東北公演へ行ってきました。今回で3回目。参加してくれたバレエ・サンプルウエストのダンサーたちに感謝！その中から5人のダンサーから手紙をいただきました。心のメッセージ、ご紹介します。



NHKの朝ドラ「あまちゃん」の久慈市の大川目小学校で初日が始まりました。またまた何もないところにステージが作られ、スタッフが休むことなく働く姿を見ながらウォームアップを始めました。元気な挨拶そしてバレエ体験と最後まであつという間に時間がすぎ、オルゴールを回したり写真撮ったり元気な子供達に会えました。10月10日に開催の岩泉町立小本小学校、中学校、大牛内分校は仮設の校舎。ここはまだ2、3年このまま勉強することです。この学校にも沢山のアーティストの方々が訪れているようですが、校長先生がバレエにとても興味を持って下さり、英語を教えている外国人の先生もとても喜んで下さいました。津波の影響で心に悩みを持つ子供も何人かいました。一生懸命声を出そうとしたり、手を出してくれました。こんな時は私たちに逆になんか励まされ、この仕事について自分を嬉しく思う気分でした。11日は初めての高校での開催で少し引き気味の生徒さんでしたが、染谷くんが頑張り生徒さんや先生方を舞台にあげ、



マイムの勉強をしました。終わったあと、先生方が解散と言った途端に皆が周りによってくれました。そして野球部の子供など僕もできるという具合にトレパックのステップを一緒に踊ってくれました。子どもたちはどこにいても元気で。さすが移動する車中の景色は様々。そして私が泊まった旅館の女将は津波に呑まれ、偶然に助かったと話してくれました。津波がどれほど怖いかそして自分で逃げる場所を探さなければいけない。高いところへ高いところへと、女将はいま山へ登る道を作っていることでした。まだまだ恐ろしい風景が目まよっています。私は心から早い復興を願いました。そして、このプロジェクトに参加できた事で、人と人が出会い、そこで繋がり、みんな生きていく事を深く感じた日々でした。

川口ゆり子

私は前回に引き続き被災地に行く事を選びました。前回よりも復興したところを見ることで、少し安堵することもありましたが、やはり現実はあるより厳しいようでした。3年経った今、やっとあの日のことを口に出せる子供も。見える復興よりも心の復興が一番大変なのではないか。環境が人を育てます。私達が出来ることを見て、子供達が夢を持つ出会いになれば本当に幸せです。思いと絆が伝わることを信じて！これからまた若い命の善



吉本真由美

き先輩になればいいのではないかと、という自らの思いをこれからも持ち続けたいと思える日々でした。そして、忘れてはいけない現実を私はどんなかたちであれ、伝え続けたいと思っています。心の通い合う場所に幸せがあると信じて。

私は今回のプロジェクトにダンサーとして岩手県の久慈市立大川目小学校、岩泉町立小本小学校、中学校、岩泉町立小本小学校、大牛内分校、釜石商工高校の3箇所で開催しました。私自身、このプロジェクトへの参加は3度目でした。3公演とも天気に恵まれ、予定通り外の公演が実現しました。我々のグループは男性1人に女性3人ということもあり、多様なペアを組むことが出来ました。それでもやはり学校の敷地をお借りして、そこに舞台を設けし公演を行うのはとても心構えが必要なものになります。「被災した方達を元気づける」つもりでこの地に踊りに来ているのですが、やはり出番の前には「本当に喜ばれるのだろうか？」「もしかしらこのような活動は必要とされないのではなか？」ということが出番の直前に頭をよぎります。しかし、見ている方たちの反応は本当に素直で、技が決まれば喜んでくれるし、おどければ笑う、叙情的な作品に対しては涙を流してくれている人もいました。第1回目のこ



染谷野委

とを思い出しますとあの時はまだ震災が起きて2カ月ほどの時でした。公演をやるにしても避難所から出てきてくれない、話しかけても表情のあまり変わらない子供もいました。それでも公演が終わればこやかに接してくれて、こちらが何か救われるような気持ちになった事を記憶しています。毎回、素直にお礼を言ってくれる東北の人達に我々は逆に元気をもらっている気がします。ですが、話を聞いたり目で見たりした東北はまだまだ復興が進んでいません。考え続けねばいけないこの問題と、日本国民全員がこれからも長い時間向き合っていくかなければならないと改めて思っています。最後に、このプロジェクトを支援してくれた方、関わったスタッフ、大工さんに感謝致します。



震災後テレビのニュースなどで目にした東北の被災地。私たちは、このドリームプロジェクトを通じて、実際にそこへ行き、その地の人達と共に過ごす事ができました。被災地で暮らす皆様、現地の子供たちに元気になってほしい！笑顔を見せて欲しい！そんな思いで各地の舞台に立ちました。普段の劇場での公演と異なり、ただ単に自分が踊るといふことだけでなく、「誰かのために」という思いが、私たちダンサーにとって、いつも増したパワーの源となりました。私は今回、宮城県のある学校に行かせていただきましたが、先生方、地域の皆様、生徒さん達：本当に喜んでくだ



橋本尚美

さいました。その笑顔を観て私は「来てよかったー！」と思ひ、とても嬉しくなりました。私たちは、一人の力ではなにか行動を起こしたくても何もできません。このようなプロジェクトがあったからこそ、貴重な体験ができたのだと思います。各地と一緒に回ったスタッフ、いろいろとご尽力頂いた関係者の方々に感謝したいと思ひます。被災された皆様の一日も早い心の復興をお祈りしております。

今年で3回目のプロジェクト。迷わず参加を決めました。その理由は初めて行われた1回目、震災後まもなくでした。バレエ公演をするには時期が早いのではないかと、受け入れられないか、いまひとつ踏み出せない私に上次さんの『心の物資も必要』という言葉が胸に刺さりました。実際に訪れて、東北の方々の温かい心に触れ、喜んで頂けたことに、自分の仕事に勇気と自信を頂くことができました。その年の暮れに公演を見てくださった方がバレエ団を訪れて下さり、その後の様子を話して下さいました。一人でも心を動かして下さいました方がいたことに、このプロジェクトの意義を実感した一時でした。



深沢祥子

本物に触れる、それを目指す、そういった心は触れれば通じるんですね。それから迷いません。このプロジェクトが続く限り参加しよう！今年も沢山の子ども達に出会えました。未来を託された子供達に少しでも豊かな心の芽を植えられたらと思います。そして、国民みんなが支えあい、出来ることを出し合えば復興がもつと進むのにと、願うばかりです。

